View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

初対面の３人会話におけるあいづち
―ラポール構築の観点から―

大　塚　容　子

Back-channels in the Conversation among Three Persons
―Perspective from Rapport Building―

Yoko OTSUKA

Abstract

The purpose of this study is to examine how three Japanese males use back-channels in two kinds of first-encounter conversations, and to analyze the relationship between the use of back-channels and rapport building.

In one conversation, one person naturally takes a listener's role and keeps using back-channels. His behavior seems to lead to rapport building. In another conversation, one person never uses back-channels and the other persons use back-channels only sometimes. It seems that they do not pay attention to rapport building in the conversation.

Key words

back-channel, listenership, rapport building

はじめに

日本語のコミュニケーションの特徴の一つとしてあいづちを挙げることができる。水谷（1983）はこのあいづちを打つという聞き手の反応に着目し、日本語の会話展開を「共話」と呼び、「対話」と区別した。対話では、会話参加者 A が情報を要求すると、会話参加者 B が情報を提供するというように、会話が進行していく。一方、共話では話し手の発話の間に聞き手が頻繁にあいづちを打ったり、話し手の発話の途中に聞き手がその発話の後半を予測して発話したりする。このような聞き手の反応は話し手の発話内容を共有しながら、会話を展開していくのに重要な役割を担う。

ところで、会話参加者が二人の会話では、一人が話し手になるともう一方が自動的に聞き手になる。話し手と聞き手が自動的に決まるわけである。会話参加者が３人になった場合、話し手はどのように決定されるのであろうか。また、一人が話し手になると残りの二人はどのような言語行動をとるのであろうか。熊谷・木谷（2010：６）は会話参加者が３人以上になると、様々なタイプの相互行為が会話参加者間に見られると述べている。

本稿では、このような多様な言語行為が生まれると思われる、初対面の男性３人による日本語会話におけるあいづちの現われをラポールの構築という観点から考察する。まず、あいづちについて述べ、調査方法を説明する。次にあいづちを量的・質的に調査分析し、ラポールの構築との

※ E-mail　ykotsuka@ha.shotoku.ac.jp

関係を考察する。

1．あいづち

堀口（1997：42）は、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義している。そして、あいづちを広義に解釈して、繰り返し、言い換え、先取り発話もあいづちと同じ機能をもつものとしている。繰り返しとは、話し手の発話の一部、あるいは全体をそのまま繰り返すこと、言い換えは話し手の発話と同じ内容のことを他の言葉に換えて言うこと、先取り発話とは話し手の発話が終わっていないときに、聞き手が話し手の発話の続きを推測して発話することである。「話し手から送られた情報を共有」するという点においては、繰り返し、言い換え、先取り発話もあいづちと同様の機能をもつと考えられる。これらはあいづちよりもより積極的に話し手の発話に関わることになる。

本稿では大塚（2009）に倣い、あいづちを3種類に分類する。すなわち、①非語彙的あいづち、②語彙的あいづち、③繰り返しである。非語彙的あいづちとは、「ああ」、「ええ」等の短い表現、語彙的あいづちは「はい」、「そうですか」等の表現、繰り返しとは話し手の発話内容を繰り返すことである。笑いやうなずき等の非言語行動は扱わない。

2．ラポール

FitzGerald（2003：19–20）によれば、ラポールはあるコミュニケーションが成功したか否かを判断しようとするときに考慮しなければならない要因の一つである。ラポールが構築された会話には笑いやユーモアが多数存在するという。笑いやユーモアは会話参加者同士の間で協調的関係が築かれなければ生まれないものだからである。

3．調査

3.1.　調査資料[1]

本稿で用いるデータは、約30分間の初対面の3人による日本語会話2種類と、会話終了後に行ったフォローアップ・インタビューである。これらの会話はビデオに録画すると同時にICレコーダーに録音した。フォローアップ・インタビューは一人ずつ個別に行い、ICレコーダーに録音した。

会話参加者はすべて同一の大学院の男子学生で初対面[2]である。会話のテーマは奈良についてである。長所、短所等、どんなことでも構わないので、奈良について自由に話すように指示した。会話終了後に行ったフォローアップ・インタビューでは、まずアンケート用紙を準備し、会話はうまくできたかどうか、会話は楽しかったかどうか、相手に好感がもてたかどうか、の3点について「はい」、「いいえ」で答えるように指示した。その用紙の記述をもとに、10分程度のインタビューを個別に行った。インタビューの内容は会話参加者の年齢、敬語使用、沈黙等についてである。本稿の基礎資料は会話を文字化した[3]ものとフォローアップ・インタビューの内容である。

表1はそれぞれの会話の参加者を示したものである。

表1　会話参加者

データ	会話参加者
12	J13、J14、J15
13	J16、J17、J18

3.2.　調査手順

非語彙的あいづち、語彙的あいづち、繰り返しをあいづちターン、それ以外のターンを通常ターンと呼ぶことにする。あいづちターンを量的、質的に調査する。

４．結果

4.1.　フォローアップ・インタビュー

フォローアップ・インタビューにおける会話参加者のコメントを以下に示す。

4.1.1.　データ12

会話参加者全員がアンケート用紙の三つの質問に対して、「はい」と答えている。

会話参加者全員が丁寧形を用いて話したことについて質問すると、「よほど仲良くない限り年齢には関係なく敬語を使う。」、「初対面だから使った。」、「敬語を使ったのは癖。」というコメントが返ってきた。また、沈黙について質問すると、「沈黙は苦手。破ろうとする。」、「気持ちがよくない。特に親しくない人だと。」、「誰かが話すと思った。何とかなると思った。流れによっては話題を出そうともした。」と答えた。

4.1.2.　データ13

アンケート用紙の三つの質問についての回答を見ると、会話はうまくできたかどうかの質問に対して、J 16は「はい」と答えているが、J 17、J 18は「どちらでもない」と答えた。会話は楽しかったかどうかの質問に対してはJ 17、J 18が「はい」と答え、J 16は「いいえ」と答えている。相手に好感がもてたかどうかについては全員が「はい」と答えた。J 16は他の会話参加者に対して「苦手だが悪い人ではなさそうだと思った。」とコメントした。J 17はJ 16のことを「おとなしくてまじめそうだと思った。」と述べた。J 18は「J 16には好感をもった。」と述べた。

J 16は丁寧形を使用することが多く、J 17とJ 18は普通形を使用することが多かったのだが、そのことについて質問すると、J 16は「顔見知りでないので。」と答え、J 17は「親しみを示すために普通形を使った。」と答えた。J 18は「J 16の丁寧形使用には違和感をもった。」とコメントした。また、J 16はJ 17の話題や話し方に対して良い印象をもたなかった。J 17とJ 18は「J 16を何とか会話に参加させようと努力した。」と述べた。

4.2.　ラポール

二つの会話はいずれもラポールが生まれたかのように見えたが、フォローアップ・インタビューの結果から、データ12ではラポールが生まれたが、データ13では必ずしもラポールが生まれたとは言えないと判断した。

4.3.　あいづちターンの使用率

表２は二つのデータにおけるあいづちターン数、通常ターン数、ターン総数、ターン総数に占めるあいづちターン数の割合を会話参加者別に示したものである。

表２から、各会話参加者がどのように会話に参加していたかがわかる。データ12ではJ 13とJ 14のあいづちターン数、通常ターン数に大きな差はない。ターン総数に占めるあいづちターン数の割合もほぼ同じである。J 13とJ 14はほぼ同じように話し手になったり聞き手になったりしていたと考えられる。J 15のターン総数が最も多いが、その68％があいづちターンである。J 15は聞き手として会話に参加していたことがわかる。一方、データ13ではJ 16のターン総数が他の二人の会

表２　会話参加者のあいづちターン、通常ターンの使用数

データ	会話参加者	あいづちターン	通常ターン	総数	あいづちターン／総数
12	J 13	29	166	195	14.9%
	J 14	31	185	216	14.4%
	J 15	204	96	300	68.0%
13	J 16	0	91	91	0%
	J 17	17	172	189	9.0%
	J 18	28	166	194	14.4%

話参加者に比べて極端に少ない。また、あいづちも全く打っていない。これはJ 16があまり積極的に会話に参加していなかったことを表わしており、フォローアップ・インタビューでJ 17、J 18がJ 16を会話に参加させようと努力したと述べていることと一致する。3人の中でターン総数に占めるあいづちターン数の割合が最も高いのがJ 18で、その割合はデータ12のJ 13、J 14とほぼ同じである。ターン総数に占める通常ターン数の割合を比較してみると、J 17がJ 18を上回っている。このことからJ 17が会話の展開をリードしたと考えられる。

次に各会話参加者が使用したあいづちの種類と使用数を表３に示す。

表３　会話参加者の用いたあいづちの種類と使用数

データ	会話参加者	非語彙的あいづち	語彙的あいづち	繰り返し	合計
12	J 13	17	12	0	29
	J 14	13	18	0	31
	J 15	181	21	2	204
13	J 16	0	0	0	0
	J 17	7	7	3	17
	J 18	25	2	1	28

データ12ではJ 14の語彙的あいづち数が非語彙的あいづち数を上回っている。J 15のあいづちの88.7%が非語彙的あいづちである。また、繰り返しも使用している。データ13ではJ 17の非語彙的あいづち数と語彙的あいづち数が同じになっており、繰り返しも用いている。J 18のあいづちの89.3%が非語彙的あいづちである。

次に、あいづちがだれが発話権をもっているときに発せられたものであるかを検討する。表４、５は各会話参加者のあいづちターン数と発話権保持者（あいづちの受け手）との関係を示したものである。

表４　データ12のあいづちの送り手と受け手

受け手＼送り手	J 13	J 14	J 15	合計
J 13		20	9	29
J 14	5		26	31
J 15	100	104		204

表５　データ13のあいづちの送り手と受け手

受け手＼送り手	J 16	J 17	J 18	合計
J 16		0	0	0
J 17	7		10	17
J 18	11	17		28

データ12では、J 15がJ 13、J 14に対してほぼ同数のあいづちを打っているが、J 13とJ 14はあいづちを頻繁に打つ相手が異なっている。J 13はJ 14の発話中に、J 14はJ 15の発話中にあいづちを打っている。データ13ではJ 17はJ 16に対するあいづちよりもJ 18に対するあいづち数のほうが多く、J 18はJ 16に対するあいづちよりもJ 17に対するあいづち数のほうが多い。しかし、J 16の発話量がJ 17、J 18の約半数であることを考えると、J 16に対するJ 17、J 18のあいづちの頻度は高いと言えよう。

4. 4.　あいづちの使用状況

各会話参加者のあいづちの使用状況を見る。

4. 4. 1.　データ12

データ12で注目すべきなのはJ 15のあいづち行動である。

（１）J 15のJ 14に対するあいづち

7　J 14　あの、一応、あの、出身は→
→　8　J 15　ああ。
9　J 14　大阪なんですけど、まあ、奈良に来て、まあいろいろ。
（学校のチャイムの音）
10　J 14　やっぱり、そのう→
→　11　J 15　ええ。
12　J 14　まあ、大阪に比べたら当然なんですけど、やっぱり、まあ、ま、田舎というか→
→　13　J 15　はあ。
14　J 14　まあ、そういうふうなまず印象が→
→　15　J 15　ああ。
16　J 14　まず一つあって、あと、やっぱりその、歩いたら、お寺とか→
→　17　J 15　はあ。
18　J 14　多いなあっていうのが→
→　19　J 15　ああ。
20　J 14　やっぱり、お寺とあと、まあ、お寺もそうなんですけど、やっぱり古墳ですかね。

（１）は会話の冒頭部分である。J 14が奈良の印象を語っているところである。そのJ 14の話の間にJ 15は頻繁にあいづちを打っている。

次の例はJ 13に対するJ 15のあいづちである。

（２）J 15のJ 13に対するあいづち

236　J 13　鳴き声をまねするっていうのが、すごいですね。
237　J 15　鳴き声（↑）

238　J 13　はい。あの、例えば犬とか猫を飼ってるじゃないですか。
→　239　J 15　ええ、ええ。
240　J 13　で、いつも同じ場所に夕方→
→　241　J 15　ええ。
242　J 13　４時とかぐらいに、あの、こう、同じ場所に、その、電柱に止まって、そのカラスが→
→　243　J 15　ええ。
244　J 13　こう鳴いているんですけど、もうカラスの鳴き方って同じ、ねえ、カアカアってこう鳴くのが→
→　245　J 15　ええ。
246　J 13　こう、あの、一般的なあれなんですけども、
→　247　J 15　ええ。
248　J 13　途中からワンとかですね。
→　249　J 15　えええ。
250　J 13　あの、こう犬が、その、例えば犬、
→　251　J 15　ええ。
252　J 13　飼ったりすると、
→　253　J 15　ええ。
254　J 13　同じ鳴き方をまねするようになってきたんです、だんだん。
255　J 14　ああ。
→　256　J 15　へえ。

J 15は上田（2008：69）が指摘するように、J 13に対してもJ 14に対しても「発話の断片ごとに」あいづちを打っている。

次にJ 13のあいづち行動を見る。次の例はポーズのあと、J 14が新たに話題を提供した場面である。

（３）J 13のJ 14に対するあいづち

102　J 14　まあ、あと、あれなんですよね。奈良って、あの、タニシあんまり見掛けないんですよ**ね**、田んぼで。
→　103　J 13　ああ。
104　J 14　あの、北の方はいるらしいんですけど、何かこの辺ではあんまり見掛けないんです**ね**。あの、大阪の方だったら、田んぼにはジャンボタニシの→
→　105　J 13　ああ。
106　J 14　あのピンク色の玉がぱあって付いてたりして。あんまり、あの、この近辺は、あんまりいないみたいです**ね**。
→　107　J 13　ああ。
108　J 14　何かその辺がちょっと、田んぼをふと見てたときに、何か足りないなと思ったら→
→　109　J 13　ああ。
110　J 14　それが。あ、タニシ少ないって。ええ。

102、104、106のJ 14の発話の中には終助詞「ね」が使われている。Kita and Ide（2007）は終助

詞とあいづちの関係を指摘しているが､J 14の終助詞「ね」の使用があいづちを誘発していると考えられる。

次の例はJ 14のあいづちである。ポーズのあと、J 15が新しい話題を提供した場面である。

（４）J 14のJ 15に対するあいづち

380　J 15　そうですね。僕は、奈良はやっぱり自然ですか**ね**。
→ 381　J 14　やっぱりそうですか。
382　J 15　町の中に自然が入ってるっていうのが、やっぱり一番うれしいなということです**ね**。
→ 383　J 14　ああ、そうですか。
384　J 15　あの、私は学部のころに、あの、名古屋に住んでたことあるんですけど**ね**。
→ 385　J 14　はい。
386　J 15　そんときは名古屋の町っちゅうのは、もう、まあ、それもやっぱり大阪と似てるところもあると思うんですけど、都会なんで、もう、町の中で住んでるようになってたんですけども。
→ 387　J 14　はい、はい、はい。
388　J 15　奈良に帰ってきたら、やっぱり自然があると、まだまだアスファルトで舗装されてるとこじゃなくて、土のところもあるとか。
→ 389　J 14　はあ。
390　J 15　ええ、町の並木にサクラが普通に、木が立ってるとか、そんなんがあるんで、やっぱりいいなあと思います**ねえ**。ええ。

J 15も380、382、384、390で終助詞「ね」､「ねえ」を用いている。

4. 4. 2.　データ13

データ13ではデータ12のように「発話の断片ごとに」あいづちを打つという言語行為は見られない。（５）はJ 17が昆虫館の話をしている場面である。

（５）J 18のJ 17に対するあいづち

343　J 17　ある意味ホラーやけど。しかもそこ、バスで行ったら１時間に１本ねんからな。乗り遅れたら30分以上待たんとあかんと思う。
344　J 18　それはなあ。昆虫ってえ、どうやっぱり標本（↑）置いてるのは。
345　J 17　いや、生きもいたで。ミツバチの巣の展示とかあったねん。
→ 346　J 18　ほお。
347　J 17　大量にいやがった。しかも、ミツバチの巣の前にクモの巣があるという、悪循環や。
348　J 18　〈笑い〉でもよう生きられるな。＊＊＊
349　J 17　（ニタリ）、大量に下に転がっとったけど、大量に生きとったから。
→ 350　J 18　うん。

次の例はJ 17のあいづち行動である。相手の発話の一部を繰り返している。

（６）J 17のJ 18に対するあいづち

327　J 18　あとはもう東大寺とか、春日大社も行ったな、ついこの間。
→ 328　J 17　春日大社。
329　J 18　法隆寺とか、薬師寺とかも行ってるはずやし。

→　330　J 17　ああ、薬師寺。

次の例はJ 16が図書館の本の返却の話をしている場面である。J 17とJ 18は発話量の少ないJ 16が発話するとあいづちを打っている。

（7）J 17、J 18のJ 16に対するあいづち

172　J 18　〈笑い〉確かにでも延滞なんかしたらあかんよな。借りてる本を絶対に。
173　J 16　けど、おれ3ヵ月ぐらいけったことがある。
→　174　J 17　ああ。
175　J 18　何したん。〈笑い〉
176　J 16　あの、置いといて、随時忘れてしまって、気付けば家に督促状というのが。〈笑い〉
177　J 18　〈笑い〉でも大体それまでに借りにこうへん（↑）そんなに使わへんかった（↑）図書館。
178　J 16　図書館、うーん、いやあまり使うことない。
→　179　J 18　ほうか。
180　J 16　やっぱりあまり文献で調べるということがないから。
181　J 18　実地で見に行ってるの（↑）
182　J 16　実地で見に行ったり、ネットで収集したり。
→　183　J 18　ああ。

J 18はJ 16の発話に対してあいづちを打つだけでなく、J 16を会話に参加させようとして、175、177、181でJ 16に質問している。

5．考察

データ12では3人の会話参加者が平等に発話するのではなく、一人の会話参加者が聞き手になっている。そして残りの二人の会話参加者のいずれかがその時々によって話し手になり、会話が展開されている。（1）ではJ 15とJ 14の二人会話、（2）ではJ 15とJ 13の二人会話になっている。J 14の発話中、J 15が聞き手になり、J 13は二人のやりとりに介入しない。同様に、J 13の発話中、J 15が聞き手になり、J 14は二人のやりとりに介入していない。（3）ではJ 13がJ 14の聞き手になっており、J 15は二人の会話に介入していない。（4）ではJ 14がJ 15の聞き手になり、J 13は二人の会話に介入していない。会話参加者は3人存在するのだが、3人が同時に会話に参加し会話を展開しているのではなく、その時々によって二人のグループができ、二人の間で会話が展開される。そして、聞き手になった会話参加者は頻繁にあいづちを打つ。もう一人の会話参加者はその二人会話には介入しない。会話参加者は3人存在しても、やりとりは二人会話のように展開され、もう一人の会話参加者はあいづちを打つこともせず、自分が発話権をとるまで会話には参加していないのである。データ12に関する限り、3人の会話参加者の発話量は均等にはなっていない。会話参加者間の情報量が均等でなくてもラポールが生まれる。聞き手の役割を担い、あいづちを打つ人が存在することが重要なのである。まさに共話的な会話展開である。

データ13では一人の会話参加者が積極的に会話に参加しなかったため、二人の間で会話が展開したが、データ12のように「発話の断片ごとに」あいづちが打たれることはなかった。それはJ 17とJ 18のどちらかが聞き手に徹するということはなく、お互いに相手の発話内容に対して自分の経験や感想を述べることが多かったからである。

（８）J 17とJ 18の会話

110　J 18　いくらぐらいかかるの（↑）
111　J 16　学園前から@@大学までやと330円とか。
112　J 17　かかるなあ。
→ 113　J 18　いや、学園前までだったら、歩いて行くから。
114　J 17　〈笑い〉チャレンジャーやな。意外と遠かったんで、あそこら。
→ 115　J 18　40分から50分ぐらいだったら、歩いて行かれへん（↑）こっからやったら大体。
→ 116　J 17　いや、おれ昔チャレンジャーしたけど、２時間かかったぞ。結構。坂道多いんだよね、あそこらへん。
117　J 18　うん。
118　J 17　それがつらいところなん。
119　J 18　あそこというか、この近辺坂道ばっかりやん。
120　J 17　ああ、多いな。むしろこの大学自体が上やもんな。

交通費が高いというJ 16の発話の後、J 18は113、115で歩いて行くと述べ、さらにJ 17はそのJ 18の発話に対し、116で２時間かかったと経験を述べている。

さらに、次の例では新しい話題を提出したJ 17の発話に対し、J 18は自分の好みをはっきり述べている。

（９）J 18の言語行動

298　J 17　ああそや。地元には霊山寺という寺、知らん（↑）富雄にあんねんけど、霊山寺って知らん（↑）
299　J 16　知らないです。
300　J 18　知らん。
301　J 17　ああ、知らんか。何か６月かな、バラで有名やねんけど。
302　J 16　お寺なのにバラ。
303　J 18　お寺でバラか。それは面白いけど。
304　J 17　そう、バラ。何かバラ園やねん。６月になったら、６月とか９月になったら、バラが一斉に咲くんや。
305　J 18　ああ。
306　J 17　で、そこの名物がバラティーとか。
307　J 18　ああ。
308　J 17　┌バラのお菓子。
→ 309　J 18　└でも神社で出すもんじゃねえような気がする。
310　J 17　まあ、お寺で、ローズティーはうまいぞ。一度行ったらわかるで。
→ 311　J 18　いや、紅茶嫌い。
312　J 17　うえっ。嫌いなんかい（↑）
→ 313　J 18　うん。あの香りがいや。
314　J 17　ローズのお菓子もあるぞ。
315　J 18　いや、お菓子ならいいんやけど。
316　J 17　クッキーも
→ 317　J 18　紅茶のあの香りがいや。

まず、J 17の霊山寺を知っているかどうかの質問に対し、J 16もJ 18もはっきりと知らないと述べている（299、300）。そして、J 18は305、307であいづちを打っているが、309で自分の感想を述べている。さらに、311、313、317で３回にわたって紅茶が嫌いなことを述べている。

発話量の少ないJ 16の言語行動を見てみると、（９）の302でお寺とバラの関係が不思議であることを述べている。また、（７）の173でも直前のJ 18の発話内容に対立するような自分の経験を語っている。

堀　他（2003）は日本人とアメリカ人が英語で会話をした場合の、日本人とアメリカ人の話題の提供のし方を調査している。アメリカ人は意見や好みを尋ねることが多いのに対して、日本人は経験を尋ねることが多いという。確かにデータ13のやりとりは（５）～（９）が示すように、経験を述べていることが多く、堀　他（2003）の調査結果と合致していると言える。しかし、自分の経験を相手の経験とは独立した形で提示するのではなく、相手の直前の発話内容に対立するような形で自分の経験を述べている。新たに自分の経験を述べる時、逆接の表現で発話が始まっていることが多いのである。（７）の173は「けど」で始まり、（８）の113、116は「いや」で始まっている。

さらに、（９）におけるJ 18の言語行動を見てみると、309で「でも」を使って自分の感想を述べ、311、313、317で自分の好みをはっきり述べている。重光（2005：230）は経験を述べることは事実であるので、対立になりくいと指摘しているが、このような経験の述べ方や好みを明確に述べるという言語行動は共感や協調的関係とは対立するものである。

ラポールが構築できたとは言えないデータ13では、一人の会話参加者が積極的に会話に参加しなかった、あいづちすら打たなかった。また、聞き手の役割に徹する人が存在しなかった。そのためデータ12に比べるとあいづち数が少なかった。これらの要素が会話参加者間での協調的関係の構築に影響を与えていると考えられる。

おわりに

初対面の３人会話２種類におけるあいづちをラポールの構築という観点から調査・分析した。一つの会話はラポールが構築できたが、もう一方の会話では必ずしもラポールが構築できたとは言えなかった。ラポールが構築できた会話では一人の会話参加者が聞き手になり、頻繁にあいづちを打つことにより、共話的な会話展開が行われていた。日本語会話では聞き手の役割、すなわちあいづちを打つこととラポールの構築が密接な関係にあることがわかる。もう一方の会話では一人の会話参加者が全くあいづちを打たなかった。残りの二人の会話参加者もあまりあいづちを打たなかった。一人の会話参加者が聞き手に徹するのではなく、互いに自分の感想や経験を語った。その中には対立を生むような情報も含まれていた。このような言語行動とラポールがあまり構築できなかったこととは無関係ではないだろう。

今回はうなずきや視線等の非言語行動は扱わなかった。データ12に見られるような、３人会話で自分が発話権をとるまで会話に介入しない会話参加者の非言語行動がいかなるものであるか、今後の課題としたい。

注

(1)　本稿でデータとして用いる会話は大学英語教育学会待遇表現研究会の資料である。データ番号、会話参加者番号は待遇表現研究会で付けられたものである。

⑵　データ12のＪ13とＪ15は面識はあったが、話したことはなかった。データ13のＪ17とＪ18も面識はあったが、話したことはなかった。
⑶　あいづちが調査項目であるため、他の発話者と重なりがあっても独立した行に記す。

文字化の記号について

、／。	語尾の音が下がって区切りがついたことを示す。
（↑）	語尾の音が上がっていることを示す。
〈　〉	非言語行動であることを示す。
（文字）	聞き取りが不確かであることを示す。
＊＊＊	聞き取りができなかったことを示す。
@@	伏字であることを示す。
┌ └	会話参加者の発話が重なっていることを示す。
行末の→	あいづちなど相手の発話が一時的に重なっているが、発話が継続していることを示す。
語頭の→	分析の焦点であることを示す。

参考文献

上田安希子（2008）「意見を述べる談話にみられるあいづちと終助詞」『社会言語科学会第21回大会発表論文集』68–71頁

大塚容子（2009）「母語話者と非母語話者による会話におけるあいづち―日・英語会話の比較―」『岐阜聖徳学園大学紀要〈外国語学部編〉』第48集、95–107頁

熊谷智子・木谷直之（2010）『三者面接調査におけるコミュニケーション　相互行為と参加の枠組み』くろしお出版

重光由加（2005）「何を心地よいと感じるか―会話のスタイルと異文化間コミュニケーション」井出祥子・平賀正子編『講座社会言語科学１　異文化とコミュニケーション』ひつじ書房、216–237頁

堀素子・津田早苗・村田泰美・大塚容子・重光由加・大谷麻美・村田和代（2003）「Face の普遍性と Discourse におけるポライトネスの表出」第21回英語学会ワークショップ口頭発表

堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版

水谷信子（1983）「あいづちと応答」水谷修編『講座　日本語と表現３　話しことばの表現』筑摩書房、37–44頁

FitzGerald, Helen. (2003). *How Different Are We? Spoken Discourse in Intercultural Communication.* Clevedon: Multilingual Matters.

Kita, Sotaro and Sachiko Ide. (2007). Nodding, *aizuchi,* and final particles in Japanese conversation: How conversation reflects the ideology of communication and social relationships. *Journal of Pragmatics,* 39, 1242–1254.